

オーディオドラマ／朗読劇

# 久遠

一人柱 観音奇譚

## 【第一話】

ニュース「台風情報をお伝えします。台風一  
五号は、二〇午前一一時現在、沖ノ鳥島近  
海にあり、ゆっくりとした速さで北へ進ん  
でいます。来週火曜には愛知県知多半島へ  
上陸する見込みで、太平洋側では暴風、大  
雨になる怖れがあります」

M フルード演奏

里美「千歌、いつまでやってんのッ。昼休み  
終わっちゃおうよ」

千歌「（演奏を止めて）わかってる。すぐ戻  
るし」

千歌（M）「あの日から、二年が過ぎた……  
：先輩のことが、忘れられない……」

M  
（OP）

※タイトルIN、ナレーション等が  
あればココに入れて、

M・OUT

恵先生「日本地図を眺めてごらん。山と川に  
覆われてるのがわかるでしょう。私たちの  
生活は、豊かな自然と共にあった。けれど  
それは自然との戦いでもあった。豪雨のた  
びに川は増水し、堤防が決壊すれば田畑家  
屋が沈んでしまう。一宮も同じだった。木  
曾川の氾濫に、昔から悩まされていた」

千歌（M）「恵先生と、目が合う。私の心は上の空。バレバレだ。朝からずっと、真つ赤に染まった先輩の白シャツが、その手元から滑り落ちたフルートが、脳裏にこびりついたままだ。先生は吹奏楽部の顧問をしている。だから知っている。私のことも、先輩のことも、今日という日が、どんな日かも……」

SE 授業の終わりを告げるチャイム

恭子「ねえ、でるってよ」

里美「絶対ウソ。ありえんでしょ」

千歌「なに？ なんの話？」

恭子「鬼火がでたの」

千歌「鬼火？」

恭子「火の玉。濃尾大橋の堤防でさ、目撃者多数。うちの弟もその一人。部活の帰りにみたって」

里美「あのねえ、火の玉なんて原理は雷と一

緒ッ。雨雲と地表の間にたまった静電気が  
……」

恭子「（遮って）なんでも科学で説明できる  
と思うなよ」

里美「できるし。森羅万象すべて説明つく」  
恭子「（呆れて）さすがの科学部。里美の頭  
ん中、数式で出来てんじゃない？」

里美「むしろ褒め言葉に聞こえるぞ」

千歌「よしなって。ホントにでたの？」

恭子「知ってる？ 濃尾大橋が完成したのは  
昭和三一年なんだけど、工事中に、三人亡  
くなったんだって」

里美「その幽霊が出たと？ 今頃になって？  
こっちが数式なら、恭子の頭ん中ファンタ  
ジーだわ」

恭子「そうやって話をすり替える。ホントは、  
怖いんでしょ？」

里美「んなわけあるか。非科学的だし」

恭子「じゃ今夜、肝試ししない？ 尾張一宮  
鬼火捜索隊、結成い！」

里美 「バカバカしい」

恭子 「怖いんだ？」

里美 「上靴で殴られたい？」

千歌 「私はなんか、気になるな……」

里美 「気になる？」

恭子 「だよねえ、気になるよねえ」

千歌 (M) 「私は思い出す。亡くなったお婆

ちゃんが言った……鬼火は、なにか伝

えたいことがあるときに、でるって……」

有紗 「ねえ、私もまぜて」

恭子 「あ、有紗。なんでもない、なんでもな

いから」

有紗 「火の玉の話してた」

恭子 「(小声で) こいつ、そっち系だったわ

……」

有紗 「火の玉みたい」

里美 「みれねえよ。存在しないし」

有紗 「火の玉つかみたい、乗りたい」

里美 「乗れるかッ」

千歌 「有紗も、一緒に探しに行く？」

有紗「行きたい」

S E 夜風

千歌（M）「私たちは夜八時、金刀比羅神社  
前で集まると、懐中電灯片手に木曾川の河  
川敷へ降りていく。秋の夜風がひんやりし  
て、首筋が震える」

里美「（ホン）ツともう、でるわけないで  
しよ……でたああああ！（叫ぶ）」

千歌「え？」

恭子「マジか……」

千歌（M）「川の流れに沿うように、ゆらゆ  
らと、まさかの鬼火が漂っていた。握り拳  
くらいの大きさで、青白い……」

里美「ぎよええええ！」

&有紗「おおおお！」

恭子「ちよっと里美、逃げんな！ お得意の

科学はどこいった！」

有紗「火の玉様ッ」

恭子「様？」

千歌（M）「鬼火が、向きを変えた」

恭子「うわッ、こっち来るし。千歌、なに突っ立ってんの！」

千歌（M）「恭子に腕を引つ張られる。そうだ、離れなきゃ、と思う」

恭子「ガチ超常現象ッ。テレビ局に電話しよ。

つーかスマホ、スマホ、撮らなきゃ」

千歌「キヤッ！」

恭子「なにスツ転んでんの！」

千歌（M）「振り向くと、もう目と鼻の先に、鬼火がいた。でも怖くない。なぜだろう、私をここで待っていてくれたような、そんな気さえするのだ」

恭子「うそ、千歌あああ！」

千歌（M）「鬼火が胸の中へ、すうーっと入ってくる。ぬくもりを感じる、暖かい……と同時に、まるで麻酔を打たれたかのよう  
うに、私は……」

S E 海の底へ潜るような、神秘的な、

ボコボコという泡の音

※以降「泡の音」と表記する。

みき「ちか、ちか……」

千歌（M）「え……」

みき「起きた？」

千歌（M）「ここ、どこだろう……立派な、

お屋敷……」

みき「熱が下がってきたみたいね。よかった」

千歌（M）「おかあ、さん……？ 着物姿

の、綺麗な人……」

みき「なにも食べとらんし、お腹すいたやろ

う。（パンパンと手を叩き）与三<sup>よ</sup>、与三<sup>そ</sup>は

いるかい？ 御粥もつといで」

千歌（M）「頭が痛い。くらくらする。なに

か大切なものが、頭の中からごそつと奪わ

れていく、そんな感じが……」

みき「顔色が悪いねえ。悪い夢でもみとった

かい？」

千歌（M）「夢？　夢か……長い夢を、みていたかもしれない。けれどその夢の中の出来事が、遠のいていく。すぐそこに在ったものが、あれ……なんだっけ……あれ……？」

S E　襖が開く

与三「奥様、御粥をお持ちしました」

みき「ちかに食べさせてあげ」

与三「お嬢様、失礼します」

千歌「えッ、先輩？」

与三「はあ？」

千歌「あ、ごめんなさい……」

千歌（M）「あれ、私、なにを言ってるんだろう、せんぱいって、え……？」

S E　襖が閉じる

千歌「お母様、さつきの人……？」

みき「えッ、わからない？　熱でおかしくなったかい？　与三兵衛やないか。え、本当に、わからない？」

千歌「思い出した！　与三さんだ」

みき「大丈夫かい？　今夜はまだ、ゆっくり  
休んどったほうがええわ。さあ目を閉じて、  
眠るときなさい」

千歌（M）「私はちか。小信このぶなかしま中島村の庄屋、  
神田伝でんえもん右衛門もんの一人娘。大丈夫、心配ない。  
覚えてる。与三さんのこともちやんと思  
出したし。私は、おかしくない」

S E　朝を告げる、鳥の声

千歌（M）「与三さんのことが、頭から離れ  
なかった。物心ついたときから、私は与三  
さんを兄上のように慕ってきた。けれど『せ  
んぱい』なんて呼んだことは、一度もない。  
それにしても『せんぱい』って、なんだろ  
う……。朝が待ち遠しかった私は、すぐに  
布団から抜け出す」

みき「与三なら、裏の畑にいるよ」

千歌（M）「大根畑を覗いてみると、手ぬぐ  
いを握り、額の汗をぬぐう与三さんの立ち

姿があつた」

与三「お嬢様、まだ横になつとつたほうがええですよ」

千歌「大丈夫です。すっかりよくなりました。なにか、お手伝いさせてください」

千歌（M）「言いながら私は、立て掛けてあつた鋤を握る……」

与三「待ってください。お手が汚れます」

千歌（M）「と、私の手に、与三さんの手が重なつた」

与三「……すみません」

千歌（M）「気のせいか、与三さんの顔が少し赤い」

千歌「毎日働き詰めじゃないですか。少し休んでください」

与三「いえ、むしろ体でも動かしたらんと、落ち着かんのです」

千歌「落ち着かない？」

与三「秋の野分のわけに大雨はつきものでしょう。去年もその前の年も、堤が切れて田畑がや

られちゃった。あの雲をみてください。今にも降り出しそうだ」

千歌「たしかに、小信川このぶかわの堤はよう切れます、本当に」

与三「村々の自普請ではどうにもならぬ。ここはお上に、腰を上げてもらわねば……」

千歌「この辺りは大切な御料地でしょう。遠からず動いてくださるものと、ちかは信じとります」

与三「だと、いいのですが……」

千歌（M）「雨は、それから一刻も経たぬうちに降り出した。次第に、勢いを増して……」

S E 大雨

みき「ちか、雨戸を閉めるよう、与三に言ってくれ」

千歌「与三さんは竜神様のお社やしらへ行くと、そう言っております」

みき「またかい。雨のときはいつもだねえ」

千歌「ちかが閉めてまいます。与三さんを

下男げなんのように使うのはやめてください」

みき「下男やろう」

千歌「お父様は跡継ぎにと、考えておったの  
でしょう」

みき「前の奥様には、お子がいなかったから  
ねえ、養子にもらったのさ。私が嫁いで、  
あんたが産まれて、旦那様の考えは変わっ  
た。いいかい、ゆくゆくはちかのお相手が、  
家を継ぐんだよ」

千歌「ちかは生まれてこないほうが、よかつ  
たかもしれません」

みき「なんてこと言うんだい」

千歌「与三さんはお父様を慕っております。  
遊び心なく働きますし、いつも村のことを  
第一に考えております」

みき「それが？」

千歌「跡継ぎにふさわしいのは、与三さんで  
す。与三さんなら、きっとこの村を守って

くださいます」

みき「守る？」

千歌「現に竜神様のところへ通うのも、大雨から村を守るため……」

みき「（呆れて）なに言っただい。この辺りはいつも水に浸かっちゃうじゃないか」

千歌「だから与三さんが……」

みき「（遮って）無駄です！ 神も仏もあるもんか。あたしの前の夫がどうなったか、言っただろう。呑まれちゃったんだよ、溢れ出す小信川にさ。与三の両親だって同じやないか。あの川は、なにもかもみんな呑みこんじまうのさ。あたしや神様なんて浮世離れしたものは、信じないよ」

SE 大雨の中、石段を昇る

千歌（M）「日が暮れても、与三さんは帰ってこなかった。居ても立っても居られなくなつた私は……」

与三「お嬢様、こんなところまで……」

千歌（M）「与三さんは、拝殿の前にいた」

千歌「雨足が一段と強うなってきました。戻りましょう」

与三「いえ、今宵は帰りませぬ」

千歌「どうして？」

与三「ここから見下ろせば、川の様子がよくわかるのです。年々土砂が溜まり、川床が高くなっている。長雨となれば、すぐに堤が切れましょう。そうなる前に、あれを鳴らさなければ……」

千歌（M）「境内の鐘楼しょうろうを、与三さんが指さす」

千歌「しかしそれでは、与三さんが……」

与三「父上はここに踏み止まり、鐘を鳴らして村人を救った。あれを鳴らすのは、今や私の務めでしよう」

千歌「お父様と同じように、ここで命を落とすというのですか」

与三「庄屋様は父上に報いるため、私を拾っ

てくださった。こいつは私にできる唯一の  
恩返しだと、そう思っております」

千歌「どうあっても、そこを動かぬと？」

与三「怯えて逃げたとあつては、あの世の父  
上に笑われましょう」

千歌「ならばちかも、一緒にいたいと思いま  
す」

与三「そいつはいけない」

千歌「どうして？ 竜神様に共にお祈りしま  
しょう。心を合わせれば、きっと願いが届  
くはず」

SE 落雷

千歌（M）「視界を覆う、光の束……」

与三「危ないッ！」

千歌（M）「……なにがあつたか、わから  
なかつた。気づけば、与三さんが私の上に、  
覆いかぶさっていた……振り向くと、大  
木が真っ二つに裂け、枝葉が落ちていた……  
……私は見上げる。与三さんを見上げる……  
……と、私は思い出した。先輩……あの

ときもこうして……私を、かばってくれ  
て……」

S E 電車が走る音

※千歌の脳裏に浮かぶ回想音。  
やがて、F・O

里美「千歌、千歌、起きろって！」

千歌「……」

恭子「救急車呼んだほーがよくない？」

里美「なんて説明する？ 鬼火遭遇ショック  
死ってか？」

恭子「勝手に殺しちゃダメでしょ。鬼火、体  
の中へ入ったよね？」

里美「食あたりで説明しよう」

千歌「う、ううん……」

里美「あ、蘇った」

千歌「里美……恭子……有紗……」

恭子「指、何本に見える？」

有紗「三本でしょ」

里美「おまえに訊いてない」

千歌「頭が、なんだか、ボーっとする……私、なにしていたっけ？」

恭子「鬼火探し隊、でしょ」

千歌「鬼火……そっか、そうだった」

千歌（M）「私は、体に鬼火が入ってきたところまで、思い出した。けれどその後のところが、わからない……ただ漠然と、遠い昔の夢を見ていたような、そんな気がする……」

ニュース「台風情報をお伝えします。台風一五号は、二一日午前八時現在、強い勢力を保ったまま北上を続けています」

SE 学校チャイム

恭子「先生、ホントに出たんですって、鬼火が」

有紗「でた、最高の夜」

恵先生（以下、恵）「べつに疑ってるわけじゃないから。実際、みた人たくさんいるみたいだし」

里美「ありえないし」

恵「いたのよ、ホントに。ただ、耕地整理が終わってからね、みなくなっただって」

千歌「耕地整理？ いつの話ですか？」

恵「大正時代ね」

恭子「大正時代か。ヘンだなあ。そうになると濃尾大橋ができる前になる」

恵「濃尾大橋が関係するの？」

恭子「工事中に亡くなった人いるんでしょう？ その幽霊が出るんじゃないかって」

恵「その話か。先生も聞いたことがあるわ。でもそれには、前ぜん日じつ譚たんがあるの」

恭子「前日譚？」

恵「授業でふれたでしょ。ここ尾西辺りは昔から水害に悩まされてたって」

恭子「あー、はいはい」

恵「でね、江戸時代の初めに大規模な治水工

事をするんだけど、これがなかなかうまく  
いかない。そこで人柱を立てたって」

千歌「人柱？　って、それって、人を生き埋  
めにする……」

恵「あるいは川底へ沈めたかもしれない」

恭子「マジか」

里美「迷信迷信」

恵「古くから伝わる機織唄にも、『おこしひがし起東の  
中島西に／人のともさぬ火がみえる／伝説  
にいう人柱の怪火』とあるし」

千歌「伝説の、人柱の怪火……」

有紗「（ぼそつと）人柱、なりたい……」

恭子「つまり人柱にされた人の怨念が、鬼火  
の正体ってこと？」

里美「ざれごと戯言だわ、非科学的ッ」

恵「同級生に詳しい人がいるから、紹介して  
もいいけど？」

千歌・恭子「お願いします」

&里美「付き合ってもらえない」

&有紗「怪火、ステキ」

S E 雨

千歌（M）「翌日、土曜の午後、私は恭子と尾西歴史民俗資料館で待ち合わせ、学芸員の宮川さんを訪ねた。里美は」

里美の声「パス」

千歌（M）「有紗は」

有紗の声「……」

千歌（M）「寝てるのだろう。つながらない」  
恭子「人柱なんて、ホントにそんなこと、したんですか？」

宮川「そういう伝承が、あるにはある」

千歌「恵先生から、江戸時代の話だと聞きましたが」

宮川「そうだね。慶長一三年のことで、今から四〇〇年ほど前の話。ときの藩主は家康の子、徳川義直よしなお。尾張藩というのは地政学的に重要だね、西国の大名が謀反を起こし、江戸へ攻め上のぼってきたときには、ここで食

い止める必要があった。そんな土地だからさ、河川の氾濫に振り回されてるようじゃ困るよね。そこで家康は、伊奈忠次いなただつぐを派遣した。この人、スゴイ人でね、利根川の東遷工事を成功させた、治水のスペシャリストなんだ」

千歌「どんな工事をしたんですか？」

宮川「当時は木曾川の支流、小信川がこの辺りを流れていた。川幅が広くて出しゅっすい水しやすく、村人は困っていた。そこで思い切って、小信川をしめきることにした」

千歌「しめきる？」

宮川「木曾川から小信川へ入る流れを遮断し、堰き止めたんだよ」

千歌「え、つまり川そのものを消滅させた、ってことですか？」

宮川「川が無ければ、洪水することもないでしょ」

千歌「そんなこと、昔の技術でできたんですか？」

宮川「それをやったんだよ。ただ、さすがに難工事だったらしく、その過程でね、与三兵衛という男が名乗り出て、工事の成功を祈願し、人柱に立ったとか」

千歌「よそ、べえ……」

恭子「ン？ どうした？ 千歌」

千歌「どこかで、聞いたことがあるような、ないような……」

恭子「与三兵衛？」

千歌「うん」

宮川「与三ヶ巻よさがまって地名が残ってるところをみると、与三兵衛は実在の人物だったかもしれないね」

恭子「あの、恵先生から、人柱の怪火について教えてもらったんですけど……」

宮川「ああ、人柱の怪火ね。それはこの地に遺る怪談話とも言える。人柱になった与三兵衛の魂が浮かばれず、さまよっていると、長らく噂されていた。実際に火の玉を見た人もいるらしい。なんでも濃尾大橋のあた

りから信行寺のほうへ向って飛ぶという。  
そういえば、川遊びしていた子どもが亡く  
なるたび、連れていかれた、とか、濃尾大  
橋の建設工事で作業員が亡くなったときも  
怖<sup>こわ</sup>あーい噂が広まってたらしいね」

恭子「そー、それ、それ」

宮川「人柱観音、って、みたことある？」

恭子「人柱観音？」

宮川「金刀比羅神社はわかる？」

恭子「えー、もちろん」

宮川「奥まで入ってみな。石造りの観音像が  
あるから。与三兵衛の魂を鎮めるため、地  
元の人がお金を出して建てたんだ」

恭子「ふくん、そっかあ。あの、なんかちよ  
つと、背筋がぞわぞわしてきたんですけど」

千歌「……ごめん、ちよつと休ませて」

恭子「どうした？　なんか顔色悪いよ」

宮川「そこに腰掛けてるといい」

恭子「もしかして、鬼火捜しで風邪ひいた？  
あの日は寒かったし」

千歌「今、先輩の顔がね、浮かんできてるの」  
恭子「え？　　どういうこと？」

S E　電車の発車ベル

車内アナウンス「ご乗車ありがとうございます」  
す。この電車は新快速豊橋行きです」

千歌（M）「二年前のことだった。先輩が会場する吹奏楽のコンクールに、私もついていった」

勇樹（与三兵衛と同じ声優）「ほら、こいつがオレの相棒さ」

千歌（M）「先輩が、自分の命と同じくらい大事だという、フルートをみせてくれた」

千歌「結構重いですね」

勇樹「触らせたことなかったな」

千歌「はい、はじめて」

千歌（M）「このときはまだ、私は吹奏楽部にいない」

勇樹「オレ、この大会が終わったらさ、音大

へ進もうと思ってる」

千歌「プロを目指すんですね、スゴイ。私、応援します」

勇樹「上京するかも？」

千歌「そのときは私、東京の大学を受験しますし」

勇樹「ありがとう。正直、千歌と離れ離れになるのが怖かった」

千歌「それまで、浮気しちゃダメですよ」

勇樹「するかッ」

乗客（女）「いやああ！」

乗客（男）「逃げて、逃げて」

千歌（M）「電車で人が刺されるのは、テレビの中の出来事だと思っていた」

犯人「うあああああ！」

千歌（M）「長髪の中年男性が、刃物を振り回していた。私の足は接着剤で床にくっついたかのように、動いてくれなかった……」

勇樹「千歌ッ！」

千歌（M）「そんな私の目の前で、先輩が：  
：：：私をかばって、私の身代わりになって  
：：：：」

間

千歌（M）「ハッと我に返ったときにはもう、  
先輩のおろしたての白シャツが、真っ赤に  
染まっていた：：：：」

乗務員（男）「抑え込め！」

千歌（M）「あのとときの光景が、昨日のこと  
のように、忘れられない。私に覆いかぶさ  
るようにして倒れた先輩の足元で、銀色の  
フルートが、転がった：：：：」

ニュース「最新情報をお伝えします。台風一  
五号は二二日午後九時現在、変わらぬ勢力  
で未だ北上を続けており：：：：」

真奈美「（ニュースにかぶせて）千歌、いつ  
まで入っとなのッ」

千歌（M）「浴槽でうとうとしていた私は、  
お母さんの一言で目が覚めた」

千歌「え！」

千歌（M）「と、胸の中から鬼火が顔を出していた。浮かび上がり、そのまま、窓の外へ……」

SE カーテンを開ける  
と、大雨

千歌（M）「部屋に戻った私は、カーテンを開き、鬼火を探した……」

SE 窓を開ける  
大雨の音、さらに激しく

千歌（M）「ベランダに出て、辺りを見回す……と、そこに、路上に、雨に打たれても消えることのない鬼火が、青白い鬼火が、漂っていた」

SE ドタドタと階段を降りる  
千歌（M）「まるで私を、誘っているかのようだった」

真奈美「どこ行くのッ。こんな夜更けに」

SE 玄関ドアを開ける  
千歌（M）「鬼火が、遠ざかっていく」

千歌「先輩？　先輩なんですか？」

千歌（M）「私はどうかしている。混乱している。鬼火が、先輩だなんて……でも感じる。あのときと、あのときと同じ血のにおいを、感じる……」

千歌「先輩、待って！」

千歌（M）「私は鬼火を追いかけて、雨の中へ、雨でできたトンネルの中へ入っていく、迷い込んでいく。真っ暗な、光のない、水の世界へ、手を伸ばして……」

S E　雨音が最大限に、

世界を覆うかのように、

激しくなり、

やがて、F・O

【第一話・了】

【第二話】

巴ともえ（下女）「旦那様、奥様がお戻りになり

ました」

伝右衛門でんえもん「おおそうか、丁度ええわ」

S E 襖が開く

伝右衛門「みき、ちよつとこつちへ来なさい」

みき「なにやら、ご機嫌がよろしいようで」

伝右衛門「さっきまで叔母様が来とつてな。

なんの用件やったと思う？」

みき「さあて、なんでございましょう」

伝右衛門「ちかの縁談や」

みき「まあ、それはそれは」

伝右衛門「わしはもう嬉しゅうて嬉しゅうて。

相手は隣となりむら村の嘉兵衛かへえんのとこの次男坊で、

福助や。みきも知つとろう」

みき「はい、存じております。嘉兵衛様も庄

屋様で、家柄は申し分ございませぬ。ほん

に良いお話でございますこと」

伝右衛門「反対はせぬな？」

みき「反対する理由がございませぬ」

伝右衛門「早速ちかに知らせてやらねば。す

まぬが、呼んで来てくれぬか」

みき「はいはい（せつかちですこと）」

S E 襖が開く

みき「あらまッ！」

伝右衛門「ン、どうした？」

みき「ここに、ちかが倒れとります」

伝右衛門「なにッ？」

みき「ちか、ちか」

千歌「……おかあ、さま……」

みき「こんなところで、なにを？」

千歌「なにやら少し、ぼーっとします」

みき「大丈夫かい？　また調子が悪くなるっ

たんと違う？　額を出してごらん……熱

は、ないようだねえ」

伝右衛門「ちか、大丈夫ならそんなところに

おらんで、こっちへ来ぬか」

千歌「はい、お父様、なんでございましょう」

伝右衛門「驚くでないぞ、おまえに縁談がきたんや」

千歌「縁談……」

伝右衛門「相手は福助と言うて、線は細いが、物腰の柔らかい、利発な男や。うちへな、婿養子に来てもよいと」

みき「旦那様はずつと、良縁を探してたのよ。

神田家を絶やすわけにはいきませんし」

千歌「そんな、急に言われましても……」

伝右衛門「戸惑う気持ちはようわかる。だがな、余計なことは考えず、万事この父に任せておけばええ」

千歌「……」

伝右衛門「ン？　なにか不足でもあるのか？」

千歌「いえ、ただ……」

伝右衛門「ただ？」

千歌「……なんでもございません」

伝右衛門「快くうんと頷き、わしを喜ばせてはくれぬか」

みき「ちか、もしや他に想う人でも？」

千歌「……」

伝右衛門「えーい、黙っておっては、わからぬではないか！」

千歌（M）「私は福助さんのことを、なにも知らない。けれどうちへ奉公に来ている巴ちゃんは、知っていると言う」

巴「こちらでお世話になる前、少しだけ、福助さんのところにいたんです」

千歌「まあ、嘉兵衛様のところに？」

巴「はい。福助さんは信仰心が厚く、虫も殺さぬお人柄、とてもお優しくうございます。けれど私はもう、福助さんとは顔を合わせることができません」

千歌「なにかあったの？」

巴「庄屋様が大事にしていた掛け軸を、汚してしまっただんです。福助さんは自分がやったことにし、私をかばってくださいました。私は折檻が怖くて、甘えてしまった。いいえ、それだけではないのです。万事そんな具合

で………」

千歌（M）「巴ちゃんの話が、止まらなくなつた。こんなにおしゃべりな巴ちゃんをみるのは、はじめてだ」

巴「ごめんなさい。私ばかり話しちゃつて。次はお嬢様の番ですね。どうして福助さんのことを？」

千歌「それがね、聞いてくれる？ 福助さんとの縁談が今、進んでるの」

巴「……よ、よかったですね。お似合いですよ、お嬢様」

千歌「私どうしたらいいか……与三さんは、なんて言うかしら……」

巴「与三さん、ですか？」

千歌「うん」

巴「あの、なんて言うか、その……私はお嬢様と与三さんが、いずれは一緒になられるものと、そう思っていましたから」

千歌「私と、与三さんが？」

巴「ごめんなさい。出過ぎたことを言いまし

た。ただ、思いますに、与三さんに内緒にしているのはよくないです。思い切って、打ち明けてみてはどうでしょう？　きっとお止めになるはず」

千歌「止める？」

巴「はい、そうに違いありません」

千歌（M）「けれど与三さんは、私を止めることはなかった。それどころか……」

与三「（戸惑いがちに）そ、それはそれは、めでたいことです。福助殿なら、お嬢様のことを大切にしてくださいませ」

千歌「真面目に聞いてください。ちかに縁談は早いと思うのです」

与三「早い？」

千歌「もうしばらく、このままでいたい。与三さんとこうして水汲みしたり、山菜をとりにいったり……」

与三「（遮り）福助殿は、婿養子に入られるのでしょう？　私は旦那様のところにおり

ますし、今と変わらずこうして……」

千歌「（遮り）そうじゃない」

与三「はあ」

千歌「だって与三さんも、その、いずれは、

誰かと……」

与三「それは……」

千歌「時の流れが、止まってしまえばよいのに……」

与三「お嬢様、旦那様は病気がちで、村人が心配しとります。なにかあつたらと……福助殿が来てくだされば、みな安堵しましょう。誰かが、村をまとめていかねばならぬのです」

千歌「ならば与三さんが家を継げばよいのです」

与三「とんでもない。身寄りのなかった私は、旦那様に拾っていただけ、それだけで充分にございます。お嬢様、どうかお幸せになつてください、この村の誰よりも」

S  
E  
雨

千歌（M）「その日の夜は雨だった。与三さんはまた竜神様のところへ向かった。そこで独り、龍笛を吹いていた。私は忍び足についていき、物陰からみつめた」

M 龍笛（テーマ曲）

※物語の鍵となる曲を龍笛で演奏。

以下「テーマ曲」と表記する。

千歌（M）「（龍笛に重ねて）龍笛は、お母様の形見だと言っていた」

間

千歌（M）「よくみると、与三さんが泣いている。雨に濡れているのかと思ったが、違った……お母様のことを、思い出しているのだろうか……」

M  
O  
U  
T

S  
E 板廊下をドタドタ踏み、襖が開く

伝右衛門「みき、一大事や！ えらいこつち  
やぞ！」

千歌（M）「ある日、御代官様よりお父様の  
ところへ飛脚が参った」

伝右衛門「ご公儀が、ついに腰を上げられた  
んや。伊奈備前守様が普請奉行となり、お  
越し下さると！」

千歌（M）「ようやく、お上が動くことにな  
った。年が明けたら、川普請を始めるとい  
う」

みき「なんとまあ、めでたいことが続きます  
こと」

伝右衛門「たわけかッ。なにを悠長なこと言  
つとる。大普請やぞ！ 尾張を護らんと、  
木曾川沿いに十里を超えるお囲い堤を築く  
との由。ついては小信川への分流をしめき  
れと。本陣は此処、小信中島に置くと言う  
し。心配事がまた一つ増えたわ」

みき「でも、それが叶いましたら、毎年まいねん安堵  
して秋の実りを迎えられるでしょう」

伝右衛門「小信川のしめきりなど、そう易々  
となるものかッ」

S E 襖が開く

千歌「お父様、お茶の支度ができました」

伝右衛門「……ふう、まずは一息つくとし  
よう」

みき「千歌、与三を呼んできておくれ」

千歌「与三さんを？」

みき「与三は川普請に詳しいやろう」

伝右衛門「そうやった、そうやった。ついで  
に叔母様にも声をかけるとしよう」

みき「叔母様も？」

伝右衛門「縁談のことや。川普請がうまくい  
かなんだら、わしは詰め腹を切らされるや  
もしれぬ」

みき「まさか、そんなことは……」

伝右衛門「そうなれば嘉兵衛さんに、ご迷惑  
をおかけすることになる」

S E 板廊下を踏む

千歌（M）「その日の夕刻、事情を聞いて母上の姉様が駆けつけてきた。与三さんも呼ばれて、みな奥座敷に入った」

伝右衛門「与三、まずはおまえの考えを聞かせとくれ」

与三「備前様は利根川の東遷工事にも関わっておられる御方。これはもう、大船に乗ったようなものかと」

伝右衛門「だと、よいがのう……」

叔母「ほんに小信川のしめきりなど、できるのかい？」

与三「それをやらぬ限り、出水でみずは止まりませぬ。備前様のご決断は最善と存じます」

叔母「おまえさん、ちよいと意固地になつたらんか。小信川を、まるで親の仇のように思っておるやろう」

与三「誰がみても、他に手立てはありません」  
叔母「しかし伝右衛門さんよ、大役を仰せつかったはよいが、こいつは家が傾くことに

なるやもしれぬぞ」

伝右衛門「庄屋は三代続かぬというが、こういうことですかな……」

叔母「言いたかないが、こうなるとわかってたら、嘉兵衛さんも考えただろうねえ」

みき「叔母様、ちかが聞いとります」

叔母「おおそうやった、そうやった」

千歌「それなら、ちかは福助さんとは……」

叔母「ええんやて。さっきの言葉は忘れとくれ。福助はな、おちかさん、おまえさんを好いとるよつて」

千歌「福助さんが、私を？」

叔母「村祭りを見て、一目惚れしたと。まあおまえさんのその見てくれじゃあ、どんな男も舞い上がるう」

千歌「そ、そんなことはありません」

みき「叔母様、こうしてはいかがでしょう？

祝言は、川普請が無事に終わってからと」

叔母「なるほど、それなら先方さんにとって都合がよからう」

伝右衛門「この際だ、わしはそれでも構わぬ」

千歌（M）「頭の中が、こんがらがってしま  
った。川普請がうまくゆかねば、村が救わ  
れない。けれど無事に済めば、私は福助さ  
んと……それなのに、与三さんは……」

与三「ようやく宿願が叶います」

千歌（M）「その日より、口から出る言葉は、  
川普請のことばかり」

与三「お嬢様、いよいよ備前様が江戸からお  
越してくださいます」

千歌（M）「私は、そんな話がしたいわけじ  
やないのに」

与三「昨夜の寄合で、病気がちの旦那様に代  
わり、この与三が現場を取り仕切ることに  
なりました」

千歌（M）「そんな話が」

与三「必ずや務めを果たしてまいります」

千歌（M）「したいわけじゃない」

千歌「与三さん！」

与三「はい？」

千歌「川普請の話はもう、やめてくださいまし」

与三「お嬢様……？」

千歌「明日、福助さんとお母様がうちへやってきました。ちかはどうしてよいやら、わからぬのです」

与三「……」

千歌「ちかは与三さんと、離れとうない！」

与三「離れるもなにも、与三はここにおりますし。いつもお嬢様のおそばに」

千歌「嘘だ！ 今だって体はここにあれども、心は、心はここにはない」

千歌（M）「今日の私は、どうかしている。気づけば与三さんの胸の内へ、飛び込んでいた。上目遣いで見上げれば、与三さんが顔を背けてしまう」

千歌「教えてください。ちかは、ちかは与三さんがどう思っておるか、本心が知りたい」

与三「私は……」

千歌「はっきり申してください」

千歌（M）「与三さんが弱々しい力で、私を  
押しつけた」

与三「それでは、申し上げましょう。私のよ  
うな賤しき身のそばに、お嬢様はもつたい  
ないと思っております」

千歌「そんなこと……」

与三「お嬢様には返しきれない御恩がありま  
す。だからお嬢様が幸せになれるのなら、  
どんなことでも力を貸しましょう。しかし  
相手が福助殿であるなら、この与三に出る  
幕はないのです……私は、三つのときに  
二親<sup>ふたおや</sup>を失い、それから十年余り、母上が大  
切にしていた龍笛を探しておりました。覚  
えておいでですね？」

千歌「ええ、もちろん」

与三「母上と共に流されてしまった龍笛は、  
土砂に埋まり、到底みつからぬとみなに笑  
われました。が、お嬢様、あなた様だけは  
違った。私と一緒に何年も、繰り返し土を  
掘り返してくださった。怪我をなさったこ

ともあったでしょう。それでもあなた様はただ、みつかってよかったです、と微笑んでくださった。あの龍笛は、平家の御代みよより伝わる家宝だったのです」

千歌「与三さんのご先祖様は、お武家様だったのでしょう？」

与三「ええ。だから龍笛にはこんな言い伝えもあります。ある女が、観音様を祀る菩提寺で毎夜笛を吹き、戦いくさで亡くした主人とめぐり逢おうていた、と」

千歌「観音様にお願ねがいすれば、良い夢を見させてくださると言います」

与三「はい。だから私は願ねがいました。たとえば夢であつても構かまわぬ。母上ともう一度話わがしたい、と」

千歌「お母様には、会あえましたか？」

与三「ええ」

千歌「よかった……」

与三「私の魂は、長らくこの体の中に入っておりませんでした。私からすべてを奪さらった

小信川のまわりを、来る日も来る日もさまよっていた。そんな私の魂を、土砂に埋もれた龍笛と共に、お嬢様、あなた様が拾い上げてくださった。もしお嬢様に出会わなければ、私はきつと、自ら父上、母上のも  
とへ……だからお嬢様は命の恩人です。  
どうか、たった一度だけの御無礼を、お許  
しください」

千歌「……よそ、さん……」

千歌（M）「与三さんが躊躇とまどいがちに、それでもきゅつと、私を抱きしめてくれた。ほんのひと時が、永遠とわに思えた。なぜだか、とても懐かしい感じがした……と、そのときだった。巴ちゃんの姿が目に入った。お使いから帰ってきたところだった」

SE 襖をピシヤリと閉める

叔母「おちかさん、どういふことか話しても  
らえんか？」

千歌（M）「巴ちゃんが、どうして叔母様に話してしまったのか、私にはわからない」  
叔母「おまえさんは福助と夫婦めおとになる契りをしたんだ。いいかい、今日を限りに、与三兵衛のことは忘れるんだよ」

千歌（M）「その日を境に、与三さんは私を避けるようになった。同じように叔母様から、なにか言われたのだろうか」

M  
琴

千歌（M）「私はお琴を弾いて、寂しさを紛らわすようになった。与三さんが吹いていた笛の音ねを思い出して、重ねて……」

M  
O  
U  
T

千歌（M）「そして、三月みつきが過ぎた。桜がすべて散ってしまった頃、与三さんは小信川のそばの仮小屋で寝泊まりするようになった

た。川普請に専念すると言い、帰らなくな  
った」

巴「すみません。こんなことになるなんて：  
：：私はただ、お嬢様にはやっぱり与三さ  
んが：：：」

千歌（M）「巴ちゃんは、私と福助さんの縁  
談を止めようとしたのかもしれない」

千歌「一つだけ、聞いてもいい？」

巴「はい、なんででしょう？」

千歌「もしかして巴ちゃんは、福助さんのこ  
とを：：：？」

巴「そ、そんな、とんでもないです」

千歌（M）「手を振り、赤らむ顔を見れば、  
答えを聞かなくてもわかることだった」

S E 大雨（長め）

小太郎「奥様、一大事にございます」

みき「小太郎かい。久しぶりに顔を見るねえ。  
どうしたんだい、慌てて」

小太郎「与三さんから言伝ことづてです。長雨で堤が、堤が切れそうにございます！」

みき「なんだった！」

千歌（M）「私は浅はかだった。もうすぐ雨季にさしかかる。川普請はいったん休止になる。与三さんが帰ってくると、そんなことばかり考えていた……」

叔母「堤が切れちゃったら、これまでやってきたことが水の泡だよ」

千歌（M）「その日は、福助さんと母上様を伴い、叔母様が来ていた」

伝右衛門「また『竜神の喉口』か。あそこは水の勢いが強く、いくら手を入れても元の木阿弥、長雨のたびにやられちまう」

叔母「備前様は大船ではなかったのかい？」

伝右衛門「江戸に戻っておられる」

千歌「ちは、こうしておる今も堤におります与三さんが、心配でなりません。流されてしまわぬかと」

叔母「おい、与三兵衛のことは口に出すなと

言ったはずだよ」

福助「与三さんは、おちかさんにとって兄上も同然。心配するのは当然にございます。私が、村々へ助け人足にんそくのお願いに参りましたよう」

たえ「福助、それがよいでしょう」

伝右衛門「あーもう、頭の痛いこっちゃわ。じつはな、御代官様より怠慢やと叱責を受けたばかりなんや。わしの持ち分だけが、遅々として進まぬ」

叔母「与三兵衛があかんのやないか。現場をうまく差配さはいできとらんのだや」

小太郎「叔母様、失礼を承知で申しますが、与三さんは誰よりも長く働くし、無言の背中に、みながついていつとります」

叔母「小太郎は黙っとれ。おまえはいつも与三兵衛の肩を持つ」

伝右衛門「もうよい、騒ぐでない。小太郎も与三と同じ、出水でみずで親を失つとるし、小信川がうらめしかろう。しかし、はてさて、

どうしたのか……」

たえ「ほんに昔から『竜神の喉口』は、呪われたようによう切れますこと。うらめしいことです」

伝右衛門「いや、たえさん、そうか、そうか  
もしれぬぞ。こいつは案外、呪われとるや  
もしれぬ。あるいは祟っておるやも」

たえ「祟り？」

伝右衛門「叔母様、そういえば中之坊に、ご

高名な御坊さんがおられましたなあ」

叔母「了<sup>りょう</sup>誓<sup>せい</sup>さんかい。南無阿弥陀仏と称え  
れば、一切の悪霊が逃げ出すという」

伝右衛門「ここはひとつ、御坊さんに頼まれ  
てはくれぬか？」

S E 神社の鈴を鳴らす

千歌（M）「その後<sup>あと</sup>、嘘のように長雨は止み、  
晴れ間が広がった。みな、これは御坊さん  
の神通力だと触れ回った。私は独り、気づ

けば真清田神社にいた。あのとき、私の中には鬼がいた。いっそ堤が切れてしまえばよいのに、と思う私がどこかにいた」

福助「おちかさん、こんなところに……」

千歌（M）「福助さんの声がした。気のせいかと思ったが、振り向くと……」

千歌「福助さんこそ、どうしてこんなところに……」

福助「正直に申しませう。おちかさん、あなたのことを想い、百日参りをしておったのです」

千歌（M）「臆面もなく言う福助さんの想いが、胸に痛い。けれど福助さんは知らない。私の中にいる鬼を。川普請が滞ってしまえば、私は、福助さんとはもう……そんな怖ろしいことを囁いた、私の中の鬼を……」

福助「おちかさんは、与三さんを好いとるのでしょう？」

千歌（M）「試すように唐突に、福助さんが

言う」

福助「そう顔にかいたりしますから、わかります。私はおちかさん、あなたに謝りたい。それを知っていながら、夫婦めおとになつてほしいと言ふのです」

千歌「福助さん……」

福助「すぐには答えが出ぬでしょう。私は気が長いゆえ、いつまでも待ちます」

千歌「お優しいのですね……けれど叔母様が、普請が終わればすぐにと……」

福助「叔母様には、二心があるので」

千歌「二心？」

福助「私が婿養子となれば、私の家いえ、立花は、この村を合わせ持つことになるのです」

千歌「それが叔母様にとって、どんなよいことか？」

福助「この縁談は、父上がいくらか包んで叔母様に持ち込んだものです。父上にはわかっております。ここは御親ごしん藩ばん尾張様の御料地。遠からずお上が動く。さすればそ

の後、<sup>のち</sup>ここには新田が広がり、豊かになる  
でしよう。だから婚儀を申し入れたのです」

千歌「……知りとうなかつたです」

福助「それは私も同じこと」

千歌「福助さんのお気持ちも、偽りですか？」

福助「偽りで百日参りができますか？ 私は

父上の使いで、小信村へ幾度も参りました。

野に咲く花は美しく、村人は気立てがよい。

私はここに骨をうずめたい。おちかさん、

まずは全力で川普請を成し遂げましょう。

青く澄んだ小信の空に、悲しみに暮れる涙

は似合いません。親を失うて路頭に迷う子

の姿は、もうみとうない。どうか、これだ

けはわかってください。小信村を愛してお

るのは、与三さんだけではないのです」

千歌（M）「曇りのない福助さんの瞳に迫ら

れて、私は、泣いてしまった。私は醜い。

あるとき堤が切れていたら、本当にどうな

っていたことか……」

福助「おちかさん、どうされたのです？」

千歌「（涙声で）福助さん、ちかも今日より共に、百日参りをいたします。私は川普請の、無事を祈って……」

S E 板廊下を歩く足音

千歌（M）「それから数日経った頃、叔母様が御坊さんを連れて家うちに来た。私は障子越しに、耳を澄ました」

了誓「あの辺りは古来より木曾川の主ぬし、八大竜王の喉口に当たるとの言い伝え。よって川をしめきらんとするのは竜神様の喉を塞がんとするも同然。その怒りにふれて、大雨、大風となるは必ひつじょう定」

伝右衛門「やはりそうであつたか……しかしそれでは、なにもできぬではないか」

叔母「いや、あるんだよ、あるんだ、できることが。ねえ、御坊さん」

了誓「竜神様に手厚く祈りを捧げなさい。その上で、仕事にかかれればよい」

伝右衛門「手厚く、というと？」

叔母「人柱だよ」

伝右衛門「人柱？　なんだって！」

叔母「ねえ、御坊さん」

了誓「言つたろう。竜神様の喉口にふれてはならぬと。それでも造作を続けるというなら、それ相応の代償が要る」

叔母「そうそう、竜神様の怒りを鎮めるには、人柱しかあるまいて」

伝右衛門「しかし本当に、本当にそれで雨が鎮まるのか」

叔母「鎮まる鎮まる。ねえ、御坊さん」

了誓「信じぬなら信じぬでもよい。その代わり、川普請がうまくゆかねば、はてさて、ここにおられるみな様は、どうなりますか  
……」

伝右衛門「それは……みきは、どう思う？」

みき「あたしや神かみほとけ仏の功德など信じませぬ

ゆえ、わかりかねます。ただ、人柱なんぞ、誰がその役をかってくれましょう」

叔母「与三兵衛が、おるやないか」

みき「与三を？」

叔母「あやつは天涯孤独の身。伝右衛門さん、  
親代わりのおまえさんから頼めば、断れは  
しまい」

伝右衛門「いや、それはならん、ならんぞ。

与三を人柱なんぞ、できるものかッ」

叔母「しかしそいつをやらねば、この村が救  
われない」

伝右衛門「それは………」

千歌（M）「私はもう堪こらええきれずに、襖を  
開いた」

S E スパンと勢いよく襖を開く

千歌「与三さんを人柱だなんて、やめてくだ

さいまし！」

伝右衛門「ちか、聞いておったか！」

S E 遮るように、けたたましく、

目覚ましのアラーム

ニュース「台風情報をお伝えします。台風一  
五号は、二三日日曜日、午前八時現在、未

だ北上を続けており……」

千歌（M）「髪の毛を強く引っ張られるかの  
ように、得体の知れない力が、私を……  
どういうこと？ やめて、お願い……頭  
が、痛い。気が、遠くなる……誰か、止  
めて、人柱だなんて、そんな、誰か、与三  
さんを助けて、お願い、誰か……」

S E アラーム、F・O

【第二話・了】

【第三話】

S E 目覚まし時計のアラーム、  
少し流して、止める

千歌（M）「朝、いつもの朝……けれど、  
なにかが違う……」

S E カーテンを開く

と、大雨

千歌（M）「嫌な雨。いったいいつになった  
ら止やむのだろう……」

S E スマホに着信

恭子の声「大丈夫？ あんた雨の中、倒れて  
たんだって？ 弟が通りがかったから、よ  
かったけどさあ」

千歌「私、倒れてたの？」

恭子の声「うそ、覚えてない？」

千歌「うん……」

恭子の声「重症だぞ、そいつは……ていう

か、そもそも河川敷でなにしてた？」

千歌「私、河川敷にいたんだ？」

恭子の声「それも覚えてない？ マジか」

千歌（M）「あの後、私、どうしてたんだろ  
う。家を飛び出して、鬼火を追いかけて：  
：：いや、覚えてる」

千歌（過去）の声「誰か、お願い、与三さん  
を、助けて、お願い、誰か：：：」

千歌（M）「ちゃんと、覚えてる。脳裏に、  
蘇ってくる。夢を、夢をみていた：：：与  
三兵衛さんが、人柱にされてしまう夢を：  
：：：」

千歌「恭子、私もう一度、あの学芸員さんに  
会いに行こうと思う。ついて来て」

宮川「うくん、人柱について知ってることは  
さ、全部話したつもりなんだけど」

千歌「本当に、与三兵衛さんは人柱にされち  
やっただんですか？」

宮川「じつはね、学術的な話をしてしまうと、

あれは一種の昔話だからさ。この時代にはもう、人柱なんてなかったと思う」

千歌「なかった？」

宮川「うん、そんなことはしない」

千歌「そっかあ、よかった……」

宮川「よかった？」

恭子「この子、人柱が夢にでてきたって」

宮川「よほど印象に残ったんだ」

恭子「それもすごくりアルな夢だったらしく……」

く……」

宮川「リアル？　へえ、どんな感じの夢？」

千歌（M）「私は覚えているかぎりのことを、

宮川さんに伝えた」

宮川「夢にしては辻褄が合ってる。少なくとも

も荒唐無稽な話ではないね」

恭子「てことはさあ、もしかして、夢じゃな

いかもよ、なんてねッ」

千歌「え、どういうこと？」

恭子「前世の記憶が出てきた、とかさ」

千歌「恭子、有紗のオカルト好きが移った？」

宮川「べつにいいじゃないか、ロマンがあつて。そういえば、心理学の先生から『前世療法』つてのを聞いたことがあるぞ」

千歌「なんですか、それ」

恭子「私知ってる。催眠をかけて、過去へ過去へ遡っていくと、前世の記憶が出てくるんだって」

千歌「嘘だあ。宮川さんは信じます？」

宮川「生まれ変わりねえ。あつたらいいな、とは思うよ。この世には、幸せな人生と同じくらい報われない人生もあるだろう？けれど人生が一回限りじゃなく、次もあるとするならさ、たとえ現世で不遇だったとしても、きっとそこには来世に繋がる意味があるはずだと、そう思える。それに、本当に大切なものをみつけるには、この束の間の人生はあまりにも短すぎる」

千歌「本当に、大切なもの？」

恭子「愛に決まってるんだろ、愛！ 本当の意味で人を愛せるようになるには、千年かか

るって言うし」

千歌「どこから出てきた話？」

恭子「昔読んだ小説。この世界は、仏様の手の平に載ってるんだって。でね、仏様が千年かかって、本当の愛へ、導いてくださるとか」

宮川「あ、それ、ぼくも読んだことがあるぞ。タイトルはたしか、久しくに遠いと書いて、『久遠』」

S E 激しい雨

学校チャイム

恭子「……と、いうことで、ぜんぶを総合的に判断すると、それは千歌のツ、前世の記憶だと思う！」

里美「非科学的！」

有紗「生まれ変わり、萌える」

千歌（M）「翌日、放課後の教室で、恭子の熱弁が始まった」

恭子「宮川さん言ってたし。千歌の夢は時代  
考証的にも矛盾しないって」

里美「それがどうした？」

千歌「あ、でも私、生まれ変わりって、あつ  
たらいいなって、そう思えてきた。だって、  
そしたらもう一度、先輩と……」

里美「あの、言いたかないけどさ、いつまで  
ひきずってんの。そろそろ新しい恋へ向か  
いな。福田君に告られてたじゃん。うかう  
かしてると恭子に取られるぞ。恭子、福田  
君ラブだし」

恭子「それをここで言うかあ（怒）」

千歌「私は先輩しか無理なの」

里美「アホか。男なんて他にもいるだろ、た  
ーくさんっ」

千歌「私ね、ずっとお兄ちゃんがほしかった  
んだ」

有紗「私も」

里美「（有紗に）おまえに訊いてない」

千歌「でね、隣に先輩が引っ越してきたとき、

神様が願いを叶えてくれたって、そう思った。それがいつの頃からか、先輩に女の子の友だちができるたび、嫉妬するようになって。これが恋なのかもしれないって、そう思った。だから確かめたかった。先輩とキスしたとき、耳の奥で鐘が鳴った。からくん、って。なぜだか、ずっと昔から、それこそ生まれる前から、先輩のことを知っていたような、そんな気さえした」

恭子「でしよう、前世の記憶ッ」

有紗「ソウルメイト！」

里美「ファンタジードもは黙ってる！」

SE ドア開く

恵「あんたたち、そんなトコでかたまってる、なにしてるの？」

里美「あ、先生」

千歌（M）「恵先生が見回りに来た。私たちはこれまでの経緯いきさつを、すべて先生に話すことにした」

恵「前世とかそういうの、先生にはよくわか

らないけど、たぶん宮川さんの話を聞いてね、勇樹君と与三兵衛がどういうわけか重なつて、夢に出てきたんと違う？」

里美「じつに合理的な解釈」

恵「実際、夢の中の与三兵衛、顔が勇樹君だったんでしょ？」

千歌「ええ、そうなんですよ。それに……」

恵「それに？」

千歌「笛を吹いてました。先輩と同じように……あ、うろ覚えですけど、たしか、こんな感じ……」

千歌（M）「私は足元の楽器ケースからフルートを取り出し、さわりの部分だけ奏でてみる」

M フルート（テーマ曲）

※テーマ曲のフルート版。

さびの部分を演奏。

千歌（M）「なぜだろう、吹いているうちに、指先が勝手に、動いてゆく」

恵「ちよつと待って！」

千歌（M）「先生の顔色が変わった」

恵「まさか、とは思うけれど……………」

千歌（M）「私たち四人を、そのまま音楽室へ連れていく」

恵「ごめんなさい。ずっと忘れていた。いえ、忘れようとしていたんだと思う。あまりにつらくて、背負えなくて……………勇樹君のことはすべて、心の奥へ、しまっていたから……………」

千歌（M）「先生が、固く閉ざされた棚を開く。小さな箱を抜き、中からSDカードを取り出す」

恵「勇樹君、将来は作曲にも挑戦したいって、そう言っていて、『頭からずっと離れないメロディがあるから』って……………」

千歌（M）「ノートパソコンを立ち上げ、先生がSDカードを挿入した」

恵「もっと早く、千歌さん、あなたに聴かせてあげべきだった……………」

M フルート（テーマ曲）

同様に、さびの部分演奏。

千歌「こんなことって……」

恭子「マジか。これって、さっきの……」

千歌（M）「私が夢の中で耳にした曲を、どうして、先輩が……」

M O U T

恵「あと、勇樹君、悪夢にうなされることがよくあるって。聞ってる？」

千歌「いえ、初耳です」

恵「川底に沈んでいく夢だって……」

恭子「人柱！ 前世の記憶ッ」

有紗「勇樹先輩、人柱」

里美「（そ）ンなわけあるかッ。偶然偶然」

恭子「偶然にしては度が過ぎてるし」

有紗「勇樹柱」

千歌「……先生、人柱って本当にあったと思いますか？」

恵「『火のない所に煙は立たぬ』って言うじゃない。そういう言い伝えがあるなら、なにかは、あったんだと思う」

恭子「だよねえ。あつたんだよ、きつと」

千歌「私……私、与三兵衛さんを助けな  
きゃ！ このままだと、人柱にされちゃう。

私の夢は、そこで終わってた」

里美「はい？」

千歌「それに……」

里美&有紗「それに？」

千歌「もし先輩が、与三兵衛さんの生まれ変  
わりだとするなら、与三兵衛さんを助ける  
ことが、先輩を助けることに繋がるかもし  
れないし」

恭子「なるほど！」

里美「ごめん、意味がわからない。あまりに  
ブツ飛んでて」

恭子「簡単じゃん。過去の歴史が変われば、  
現代だって変わるでしょ」

有紗「パラレルワールド！」

里美「だからファンタジーどもは黙ってる！  
っーか夢だろ。夢の中の出来事が変わった  
ところで、それが現実に影響するか？」

恭子「そんなの、やってみなきゃわかんないでしょ」

恵「なんだか先生まで、頭の中が混乱してきた。勇樹君しか知らない曲を、どうしても、千歌さんが……」

千歌「先生、やっぱりこれって、前世の記憶なのかもしれないね」

里美「ダメだ、こいつまで汚染された」

ニュース「台風情報をお伝えします。つい先ほど、午後六時三〇分ですが、台風一五号の影響で、気象庁は愛知・岐阜・三重の三県に、大雨警報を出しました。記録的な大雨になっており、明日未明には愛知県知多半島へ接近する見込みです」

S E 激しい雨

恭子「千歌、さすがに帰ろう」

里美「こっちの身にもなれって。警報出てん

だぞ」

千歌「一人で大丈夫だから、ほつといて」

恭子「ほつとけないから来てんでしょッ」

千歌（M）「三人の傘は逆立ちしてるし、みんなもうズブ濡れだ」

里美「何故にそこまで鬼火にこだわる？」

千歌「あの世界へ戻るには、鬼火の力を借りるしかないと思うし」

里美「本気で言ってる？」

千歌「本気も本気」

里美「百歩いや千歩譲って鬼火がいたとしよう。しかしその鬼火に、夢の世界へ誘う特殊能力があるとでも？ もっと言うなら、夢と過去がつながってるとでも？」

恭子「あのさあ、里美も科学科学って言うならさあ、そのお得意の科学で協力してあげなよ」

里美「協力？」

恭子「タイムマシンつくって」

里美「できるかッ！」

恭子「よくみかけるじゃん」

有紗「私、乗ったことあるよ」

恭子「だよね。マジ乗りてえ」

里美「アホか、おまえら。ていうかまあ、たしかに、相対性理論だと光の速さへ近づけば近づくほど時間が遅れることになる。でもって、そのまま光の速さを超えちゃうと、どうなるか。今度は時間が逆転し、過去へ行ける、とかなんとか、SFじゃみかける話だが、光の速さを超えるものなんて、この世には存在しない」

恭子「なるほど、光の速さを超えればいいんだ？」

里美「人の話聞いてた？」

恭子「愛は光速を超えますッ！ つーことで私、千歌の家からフルート借りてくる」

里美「なんでフルート？」

恭子「千歌と勇樹先輩、与三兵衛、時代をまたぐ無限の距離を、光速で超えます！」

千歌（M）「止める間もなく、恭子は走り去

った」

里美「あいつの思考回路がどうなってるか。

一度配線を調べたい……」

有紗「だね」

里美「おまえもだぞ」

S E 豪雨

千歌（M）「いくら探しても、鬼火をみつけることはできなかった」

里美「うわッ、かなり増水してるし。これ以上いたらヤベえって……」

千歌「わかってる。もうお終いにするし。最後に、人柱観音まで行ってもいい？」

里美「人柱観音？」

千歌（M）「宮川さんが教えてくれたとおり、金刀比羅神社の奥へ入ってみると、激しく雨に打たれる石造りの観音像が、そこに在った」

恭子「来ると思ってた」

千歌（M）「と、恭子が先回りしていた」

恭子「はい、先輩の形見でしょ。フルート」

千歌（M）「なにをさせたいのか、私にはわかる。先輩と私、そして夢の中の与三兵衛……みんな与三さんと呼んでたっけ……時空を超えて三人をつなぐものは、この、笛の音だ……」

M フルード（テーマ曲）

祖母の声「（演奏に重ねて）観音様はのう、その眼で過去世、現世、来世の三世さんぜを見渡しておられる。青白い鬼火はのう、人の魂や。観音様が亡くなった人の魂を鬼火に変えて、遣わしてくださいさるんや。怖れることはない。鬼火に出で遇おうたら、その身を委ねてみよ」

千歌（M）「私は思い出した。お婆ちゃんの言葉を、はつきりと……」

恭子「鬼火だ！」

有紗「ベントラ、ベントラ、スペース……」

里美「嘘だろッ！ 幻覚だ、幻覚と言ってくれ！」

千歌（M）「気づけば、観音像の真上に、青白い鬼火が、姿を現していた……」

M テーマ曲、フルート版の演奏から、  
龍笛の演奏へ変える。

そこへ重ねて、泡の音。

里美「どうなってんの？」

恭子「頭が、頭が割れそう」

里美「千歌が、千歌が離れてく……」

恭子「里美、有紗、私の手、握ってて……」

有紗「うん」

恭子「そこ、手じゃない」

S E 砂利を踏む

福助「素敵な音色です。それは与三さんの龍笛ですね？ 巴ちゃんから聞きました。『自分  
分が帰る日まで預かっていてほしい』と、

言ったとか……」

千歌「ちかにできることといたら、川普請の成就と、みなさんの無事を祈ることだけです」

福助「こうして百日参りの都度、おちかさんは拝殿の前で吹いておられる。そのかいあってか、川普請も平穩に半分が終わりました」

千歌「でもまだ半分残つとります」

福助「ええ、雨季も過ぎましたし、この秋からが本番でしょう。いよいよ本腰入れて小信川のしめきりが行われます。おちかさん、龍笛と比べればひどく見劣りしますが、これを収めてください」

千歌（M）「それは、赤い糸の入った御守りだった」

千歌「福助さん、ちかは、さきほどまで白昼夢を見ておりました」

福助「白昼夢？」

千歌「どうやら笛の音ねに、ちかの心も奪われ

ておったのでしよう。ちかは、遠い異国の地におりました。そこで耳にしたのです。与三さんが、人柱にされてしまった、と」

福助「またその話を……ご安心ください。そんなことはさせませんよ、絶対に。叔母様は与三さんに庄屋を継がせたくないのでしょう。それに……」

千歌「それに？」

福助「……」

千歌「言つてください」

福助「酷い不作が、この辺りを襲ったことがありました。村役はみな蔵を開いて村人を救った。けれど蓄財に熱心だった叔母様だけが、なにもしなかった。与三さんの御父上は叔母様の家の門を叩き、お救いを迫つた。それを根に持つておられるのでしよう」

千歌「そんなの、与三さんとは直接関係のないこと……」

福助「人柱など古いにしえの悪習です。庄屋様ならきっと、わかつておるはず」

千歌（M）「けれどお父様は、わかっている  
かった。与三さん呼び出し、こっそり奥  
座敷へ招き入れ、頭を下げたという」  
伝右衛門の声「与三、すまぬ、このとおりだ。  
人柱に立ってはくれぬか」

S E 襖が開く

千歌（M）「ある日、与三さんは覚悟を決め、  
私のもとへ別れの挨拶に来た」

与三「お嬢様、人柱など愚かなことだと、そ  
う思うでしょう。私もはじめは首を横に振  
りました。しかし三日三晩考え、人柱とな  
ることを決めたのです。川普請はこれから  
が正念場、『竜神の喉口』をしめきります。  
崇りを怖れる者がおりますし、そうでなく  
ともあそこは最大の難所、やる前から匙を  
投げてる者も少くない。これでは、う  
まくゆくものも、ゆかぬ。ならば私が……

：「

千歌「（遮り）与三さんが人柱になって、なにが変わるといふのでしよう」

与三「みな的心持ちが変わります。この与三、一世一代の大芝居を打ってやりましょう。この身と引き換えに竜神様の怒りを鎮め、しめきり工事の成就や間違いなしと、高らかに謳い上げてやりましょう」

千歌「そんなこと、そんなことのために……：（涙ぐむ）」

与三「小信川のしめきりが無事に終われば、田畑も家も人も、もう流されることはない。私や小太郎のように出水でみずで親を失う子もいなくなる。それを想えば、この身一つを捧げることなど、軽い」

千歌「いいえ、命に軽いも重いもありません！与三さんはこの世にたった一人しかおらんのですよ。与三さんがいなくなったら、ちかは……」

与三「お嬢様には福助殿がおられます。福助

殿がお嬢様を守ってくださいるなら、代わりに私は、この村を守ります」

千歌「嫌です！ そんなの、与三さんが人柱だなんて……どうしても、どうしても人柱に立つというなら、ちかも共に人柱になりとうございます」

与三「それはなりません」

千歌「古来より竜神様は生娘を好むと聞きます。違いますかッ」

与三「お嬢様、どうかわかってください」

千歌「わかりません。ちかも共に、人柱になります！」

与三「お嬢様……わかりました、そうまで言われるなら、明日<sup>あす</sup>もう一度、旦那様と話し合<sup>あ</sup>うてみましょう」

千歌「約束してください。人柱のことは忘れろと」

与三「ならばお嬢様も誓ってください。人柱になるなど、もう言わぬと」

M 龍笛（テーマ曲）

千歌（M）「（笛の音に重ねて）夜は満月に  
なつた。庭に出ていた与三さんが『笛を吹  
きたい』と言うので、私は預かっていた龍  
笛を返した」

間 曲、流したまま

千歌（M）「月明かりに照らされて、笛を吹  
く与三さんの立ち姿は、凜として美しかつ  
た。私は、お琴を縁側に出した」

間 曲に、琴を重ねる

千歌（M）「（合奏に重ねて）音が重なるた  
び、私たち二人の心もまた重なっていく、  
一つになる、そんな気がした。ずっとこう  
して、いつまでも、ずっとこうして……」

M 合奏を、

中途半端なところで止めて、

与三「お嬢様……」

千歌（M）「知らぬ間に、涙が溢れ出ていた。  
与三さんが寄り添ってくれる。その優しさ

に満ちた瞳を見ると余計に、涙がもう、止まらなくなっていた」

千歌「与三さん、ちかは、ちかはもうどうしてよいのか、わからぬのです」

与三「……福助殿のことを、考えておられたのでしょ？」

千歌「はい……」

与三「御婚儀という門出のときは、誰しも迷いが生じるものです」

千歌「そんなんじゃない、そんなんじや……：ちかは、わかってしまったのです。気づいてしまったのです、ちかはもう、自分の心を偽り続けることが、できません……（涙声で）ちかは、与三さんのことが」

千歌（M）「与三さんが大きな手で、私の口を、そっと塞いだ」

与三「言ってはなりません。それを言っしまえば、耳にしまえば、私もまた、私の心を抑えることができなくなります」

千歌（M）「私は与三さんの手を、払いのけ

た」

千歌「ちかは、ちかは与三さんのことが……  
……」

間（静寂）

千歌（M）「時の流れが、止まった……重  
なっていた唇が離れたとき」

与三「すみませぬ。私はまたお嬢様に、失礼  
なことを……あの満月が、私を惑わした  
のでしょう」

千歌（M）「私は、与三さんの本当の気持ち  
を、知ってしまった。頬に染み入るように  
冷たかった涙が、どこか温かいものへと、  
変わっていた……」

M 再び、テーマ曲

合奏、しばらく流して、O U T

S E 雑踏と、走る足音

千歌（M）「与三さんは嘘をついていた。最  
初から、私に……福助さんに手紙を届け

てほしいと言う。嫌な予感がして、私は道行く途上、手紙を開いてしまった」

与三の声「福助殿、私は人柱に立ちます。どうかお嬢様のこと、くれぐれもよろしくお願いします」

千歌（M）「私に手紙を託したのは、私を村から遠ざけるためだった」

SE 走る足音

千歌（M）「私は走った。走り続けた。足の皮が擦りむけても、痛みさえわからなくなっていた……遠くに、行列がみえた。御坊さんを先頭に、白装束をまとった与三さんがいた。お父様、お母様の姿もあった。大勢の村人が何事かと、後あとに続いていた」

千歌「与三さん！ 待つて！」

千歌（M）「精一杯声を張り上げたが、誰も気づいてくれない。そこはもう『竜神の喉口』だった。私は人垣を掻きのけ、前へ、前へ進む、と……」

了誓「みなの人衆、よく聞け！ ここにおけるは

小信中島の与三兵衛。小信川のしめきり普請に先立ち、人柱となりて川の主、八大龍王にその許しを得んとす」

千歌（M）「川岸に、与三さんが立っているのが見える」

千歌「与三さん！ 与三さんッ！」

千歌（M）「声が届いた。与三さんが、私の姿に気づいてくれた。それなのに、与三さんは私と目を合わせてくれない」

千歌「与三さんッ！」

叔母「やめな！」

千歌（M）「誰かに、腕を引っ張られた。振り向くと、叔母様だった」

叔母「与三兵衛は強いられて人柱に立つんじゃないよ。自ら選んだことなんだ。ぎやあぎやあ騒ぐんじゃない」

千歌（M）「叔母様が、ぐつとつかんで放してくれない。見れば川沿いに、一艘の小舟があった。石を積んでいる。船底の栓を抜けば、沈むようにできてるのだろう。ああ、

与三さんが、お父様に連れられて……」

千歌「待って！　お願い……」

千歌（M）「どういうわけか、腰が抜けてしまった。与三さんが、遠のいていく……それなのにもう、腰が上がらない。ああ、与三さんが、舟に……」

侍「やめよ！　やめんか！」

千歌（M）「と、そこに、お武家様が数人……さっと川辺へ降りてゆく」

侍「備前様のお越しであるぞッ。おかしな真似をするでないッ」

千歌（M）「村人たちが一斉にしやがみ、平伏した。その向こうに、陣笠を被った眼光鋭い御代官様が立っていた。後で知ったことだが、江戸からお戻りになられたばかりの伊奈備前守様だった。備前様はお父様を呼びつけ、きつく叱責されたという」

備前守の声「そのほう、わしの顔に泥を塗るつもりか？　この伊奈備前が人柱を立てたとあっては、天下の笑いものになるぞ」

千歌（M）「私の目には、備前様こそ竜神様  
だと映った。備前様がきつと、この川普請  
を無事に治めてくださる。そう願った」

【第三話・了】

【第四話】

SE 「エイヤー、エイヤー……」

と、村人たちの掛け声

千歌（M）「伊奈備前様の差配は見事という  
他なかった。足繁く現場を回り、村人たち  
に声をかけていく。前代未聞の難工事だと  
いうに、士気は高まるばかりだった」

伝右衛門「胸のつかえがストーンと下りたわ。

万事順調に進んどる」

みき「この春には、ちかの祝言をあげられそ  
うですねえ」

伝右衛門「まだ雪も降つとらんのに、春の話  
をするなや」

みき「よいではありませんか」

千歌（M）「小信川のしめきりは、命がけだ。

小舟に石を積み、漕いでいく。指示された  
場所で船底の栓を抜き、沈める。急流を泳

いで帰ってくる、の繰り返し。水泳達者が集まっていた。その他の村人は、蛇籠に石を詰めては、川底へ落としていく」

S E 人ばかり

千歌（M）「私たち女はというと、なにかで  
きることはないかと思案し、炊き出しをす  
ることにした」

千歌「はい、汗物はこちらですよ。慌てなく  
ても大丈夫ですよ」

千歌（M）「私は炊き出しにかこつけ、与三  
さんの姿を遠目にみられて、嬉しかったし、  
どこかホツとしている」

巴「お嬢様、少し休みませんか」

千歌「まだはじめたばかりですよ」

巴「お話したいことが、あるんです」

千歌（M）「いつになく神妙な面持ちで、巴  
ちゃんが言った」

間

巴「お嬢様は福助さんと、百日参り를続けておるとか」

千歌「それは川普請の成就を祈願して……」

巴「ご婚儀の準備も、着々と進んでおるようですね？」

千歌「それは……」

巴「でも本当はそんなこと、望んではおらぬのでしよう？」

千歌「……」

巴「はつきり申してください、お嬢様」

千歌「もう決まったことです。女子おなごの身で、なにが言えましょう」

巴「お嬢様は与三さんのことを好いとるのでしよう？　そうなのでしよう？」

千歌「と、巴ちゃんのほうこそ、福助さんのことを……（声が小さくなり）ご、ごめんなさい……」

巴「ごめんなさい？　どういう意味ですか」

千歌「それは、だって……」

巴「お嬢様、そんな言葉、聞きとうなかつた

です。巴が余計みじめになります。お嬢様がもし福助さんを選ぶなら、どうか本気で福助さんのことを愛してください。そうでなければ福助さんがあまりに不憫です。与三さんのことは、今日を限りに忘れてください」

千歌「忘れる？ そんなことは……」

巴「勝手ですよ！ これでは、福助さんも与三さんも振り回されてしまう」

千歌「私が、振り回してる？」

巴「……今日で巴は、お嬢様のことが嫌いになりました」

千歌「巴ちゃん……あの、コレ、受け取ってくれない？ 今の私が持つてちやいけなような、そんな気がしてた。むしろ巴ちゃんが持つてたほうが……」

巴「（遮り）なんですか！ こんな御守りッ」

SE 暴風雨

ニュース「ニュースの途中ですが、二五日午前七時現在、愛知県知多半島に上陸している台風一五号について、今、大雨特別警報が発表されました。数十年に一度しかないような災害が差し迫っています。最大級の警戒が必要です。周囲の状況を確認し、ただちに安全を確保してください」

S E 暴風雨、続ける

千歌（M）「季節外れの野分が、早朝から小信村を襲った」

伊奈備前の声「下がれッ、下がれッ！ 作業はいったん休止にせよ！」

千歌（M）「その日は、炊き出しどころではなくなっただけ」

下男「旦那様、木曾川が荒れ狂っております。あつという間に水かさが……」

伝右衛門「いつもこうや、『竜神の喉口』が、あと一歩で塞げるというに……」

叔母「だから言わんこっちゃない。人柱を立てんから、竜神様のお怒りを……」

伝右衛門「済んだことは言わんでください。

後はもう、一刻も早う野分が過ぎ去ってくれんことを、祈るしかない」

千歌（M）「その願いは、届かなかつた。日が暮れても、雨風あめかぜは強まるばかり」

SE 襖が開く

小太郎「旦那様、備前様の使いで参りました。

小信川の堤が、今にも切れそうだと」

伝右衛門「なんと！」

小太郎「みなで土俵を積んでおりますが、手が足りませぬ。木曾川がまるで大蛇のように、闇の中をはい回っております」

伝右衛門「ならば、わしも参るとしよう。足

腰立つ者は、みな総出じゃ」

千歌「お父様、ちかも参ります」

伝右衛門「たわけかッ。女の出る幕ではない」

千歌「なれどそこには、そこには与三さんが……」

S E 襖が開く

福助「庄屋様、ただいま助け人足を百人、引き連れてまいりました」

伝右衛門「福助さんか、よいところに……  
嘉兵衛さんが先回りしてくれたんだな、ありがとう」

福助「堤が切れたとあっては、しめきり普請も最初からやり直しとなりました。そいつはいけない。備前様と共に一つになった心も、ここで切れてしまいました」  
伝右衛門「そのとおりや！ よう言うた。小信を賽の河原にしてはならぬ。築いては崩れ、築いては崩れとあっては……」

S E 暴風雨、激しく

千歌（M）「男たちは老若問わず総出となつた。堤に上り、土俵を積み、杭を打って支える。水かさがもう、足元に迫っていた」  
福助「おちかさん、お願いです。御屋敷へ戻

つてくださいます」

千歌（M）「私は男のなりをし、福助さんたちの中にいた。私の強情さに負けて、福助さんが機転を利かせてくれた」

福助「ここまでが精一杯です。これ以上は危のうございます」

千歌「それは福助さんも同じこと。それに、あの向こうには、『竜神の喉口』には与三さんが……」

福助「（遮り）おちかさんは我が身より、与三さんが心配なのです」

千歌「……（きつぱりと）はい」

福助「……わかりました。それでは与三さんの元へ案内しましょう。その代わり、与三さんが無事とわかったら、どうか御屋敷へ戻ってください！」

SE 暴風雨、続けたまま

千歌（M）「福助さんと私はみなと離れ、与三さんのところへ向かった……が、まるで真っ暗な穴の中を進んでおるようで、一寸

先も見えない……

千歌「きゃッ！」

福助「おちかさん！」

千歌（M）「強風に体を奪われて、足を滑らせてしまった私の手が、福助さんの手から離れていく……私は堤の上から奈落の底へ引きずり込まれるかのように、私は……」

福助「おちかさん！（叫ぶ）」

S E 暴风雨（長め）

恭子「千歌、千歌ッ。起きて！」

里美「死んだんじゃない？」

有紗「キスしてみる？」

里美「なぬ？」

千歌「う、ううん……」

恭子「千歌！」

千歌「……え、恭子、里美、有紗……え？」

恭子「どんぶらこ、つーか、スゲエ勢いで桃尻が流れてくるかと思いきや」

里美「折れ曲がった木に引っかかっていたぞ。でなけりやジ・エンドだった」

千歌（M）「私は振り向く、振り返って辺りを見回す。まさか……」

恭子「驚いた？ 私たち、タイムスリップしてるんだよ！（興奮）」

有紗「濃尾大橋ないよ！」

千歌「え、ちよつと待って、え……」

恭子「どうした？ 千歌」

千歌（M）「記憶が、江戸時代を生きていたちかの記憶が、頭の中に、どつとなだれ込んでくる……私は、私はちか、小信中島の庄屋・神田伝右衛門の娘……私は……」

里美「頭打って壊れたか？」

千歌（M）「そうだッ。私は与三さんを、助けに来たんだっけ……」

千歌「恭子、里美、有紗、『竜神の喉口』へ

行こう」

恭子「は？ どこ、そこ」

千歌「スマホはないの？ 検索してよ」

恭子「江戸時代まで電波届く？」

里美「アホか。夢だろ、ここ。夢なら空だつて飛べるんだ。ほらッ」

恭子「……飛べてないし」

里美「まあ待て。ここは改めて冷静に、科学的に考えてみよう。明晰夢<sup>めいせいむ</sup>って、わかる？」

恭子「明晰夢？」

里美「夢の中で夢を見てる、ってことに気づくことがある」

千歌「もう、そんな話はいいから、先へ進もう」

有紗「記念写真撮ろうよお」

千歌「（遮り）先へ、進みましようッ」

M しばらく流す

千歌（M）「私たち四人は、線路ならぬ堤に

沿って、歩くことにした」

Mに、突然かぶせて、

SE 暴風雨（MはOUT）

恭子「うわッ、下、下みちやダメ、この堤防、もうもたんし！ ウソ、こんなところで死んじやうわけ？」

里美「騒ぐなボケ、死なんし、明晰夢だし」

恭子「お母さくん！（涙声）」

&有紗「ママあん！（涙声）」

千歌（M）「と、目の前に、人だからが……：村人が集まり、土俵を積んでいる。その中に、与三さんの姿が……」

与三「お嬢様！ こんなところまで、どうして……」

千歌（M）「間違いない。やっぱり与三さんは先輩だ。顔も声も、同じだった」

恭子「え？ 勇樹先輩？ マジで？」

里美「つまりこいつは千歌の願望が生んだ、イリュージョン……」

有紗「輪廻転生、萌える」

千歌「(遮って) 与三さん、これは台風なんです！ 無理です！ ここにいちやダメです！」

与三「たいふう？ しかしここで食い止めねば堤がもたない。いつも一番弱いところがやられるんです」

千歌「逃げてください、早く！」

小太郎「待たせたねッ、与三さん」

与三「小太郎か」

千歌(M)「振り向くと、ちかの記憶の中で微笑む少年、小太郎君の姿があった。若者たちを十数人、連れて来ている」

小太郎「え！ お嬢様、なんでここに……」

千歌「なんでじゃない、そっちこそ。ここに来ちゃダメ」

小太郎「お構いなく。もとより命を捨てる覚悟はできとります。しめきり普請がうまくいけば、もう田圃は流されねえんだ」

若者A「おいらも同じや、小太郎。前代未聞の難工事、ここで踏ん張んねえと、取り止

めになるやもしれぬ」

千歌（M）「与三さんが、村人たちが、小太郎君が、若者たちが、みな一心不乱に土俵を積み上げ、杭を打ち始める」

里美「しゃーねえ、手伝うか」

恭子「逃げよつて」

里美「うちら凡人は、せめて夢の中くらい、ヒーローになるか」

有紗「ヒーロー、なる」

与三「いいかげんにしてください、お嬢様。離れてください。誰とは存じませぬが、そちらのお嬢様方も、え？　巴さん？」

恭子「巴？　私は恭子」

与三「とにかく、御屋敷へ戻ってください」

千歌（M）「与三さんは一息つくたび、私たちを追い返そうと背中を押した」

千歌「与三さん、待ってください、私にはわかるんです。あなたを失ったら、ちかさんがどうなってしまうか。だって、私も同じで、あなたを失ってしまったんだから！

だからお願い、離れて！　生き残ってください！　お願い！」

与三「お嬢様の言っておることがわかりませぬ。それに、いつものお嬢様じゃない」

千歌「私は、未来から来ました」

与三「みらい？」

S E　激しい水飛沫

若者 A「駄目だ、もうもたねえ」

村人 A（トメ）「堤が、堤が切れちまうぞ！」

村人 B（タツ）「黙って土俵を積み！　私たちの後ろには、母ちゃんや娘っ子がおるんやツ」

与三「もういい！　お嬢様の言うとおり！

みんな逃げてくれ！　生き残ってくれ！」

村人 B「与三さん……」

与三「タツさん、あんたが死ねば、子が泣く。もう誰の涙も見たくない。後は、自分一人でなんとかする！」

小太郎「馬鹿なこと言うんじゃねえ」

与三「小太郎か、お嬢様たちを任せるぞ」

小太郎「嫌だって！　おらは与三さんと一緒に、ここで死ぬッ」

与三「（叱りつけるように）小太郎！（転じて優しく）……頼む、どうか最後の我が儘を、受け入れてほしい」

小太郎「……わ、わかったよ。その代わり、お嬢様を連れて帰ったら、必ず戻ってくるからな！」

千歌「やめて、離して！」

千歌（M）「若者たちに、腕を引っ張られる。

与三さんの姿が、遠のいてゆく」

千歌「与三さん、待って！」

与三「さあて荒れ狂う竜神よ！　この与三が、鎮めてみせようぞ！」

村人A「一人でかぶくなよ」

与三「離れてください、早く」

村人B「子は親の背中を見るといふなら、わしの死に場所はここに決めた。息子があんなのように育ってくれたら、本望や」

村人C「与三さん、わしらの命はなあ、あん

たの父ちゃんの鐘に救われたんや。その借りはな、ここで返させてもらおうぞ」

与三「トメさん、タツさん、みんな……」

千歌（M）「村人たちは誰一人、その場を離れなかった。離れたら村がどうなるか、みんなわかっていたからだ。私は、この世に命より大切なものはないと思っていた。けれど男たちの背中が教えてくれた。命よりも大切なものが、あることを……と、そのときだった」

SE 溢れ出す、水流

千歌（M）「津波のような、大きな黒い壁が、土俵の上から覆いかぶさってきた」

千歌「与三さん！」

千歌（M）「私は小太郎君の手を振り払い、

与三さんのところへ、走る」

与三「来ちゃ駄目だ！」

SE うねる水流へ、

泡の音を重ねる

間

千歌（M）「……………どれくらい時間が経った  
のだろう……………いや、どれほど経って  
ない。私と与三さんは、宇宙を漂っていた。  
ダークブルーの、水でできた宇宙。星々が  
煌めくように、無数の欠片かけらが散らばり、青  
白い光を放っていた。と、その一つが大き  
く膨らみ、私たちを呑み込んだ」

SE 泡の音に、  
ええじゃないか狂乱踊（幕末）を  
重ねる

男の声（与三と同じ声優）「世直しと言って、  
京の町も物騒になった。だがな、俺は行か  
ねばならぬ。この国の明日あすを賭け、同志が  
闘っておるのだ。みなが平安に暮らせる日  
が到来するまで、俺たちの祝言もまた、お  
預けとしよう」

SE 同様に、泡の音に機関銃を重ねる  
男の声（同）「お嬢様、いよいよ私も赤紙召  
集となりました。お国のため、ではありま  
せん。お嬢様を守るため、私は戦地へ向か

います。戦争とは馬鹿げたものです。しかしその馬鹿さ加減に人々が気づくには、なお多くの命が犠牲とならねばならぬのでしよう」

千歌（M）「走馬灯のように、幾つもの時代を生きた先輩の、精悍せいこんな横顔が、目の前を通り過ぎていく……そうだ、私は、私たちは、生まれ変わりながら、繰り返し繰り返し返し出合い、愛し合ってきた」

女の声「あなたはまだ若い。家のことうちはもういいから、再婚を考えなさい。あの子の遺品は何もない。空襲で燃えちゃった。手元にあるのは、ビルマで亡くなったという、死亡通知書だけよ」

千歌（M）「それなのに私たちは、どの時代でも、最後まで添い遂げることがなかった。私はいつも、あの人を失った」

SE 泡の音、小さくなり、

観音経（世尊妙相具……）

を重ねて、流し続ける。

千歌（M）「私は祈った。過去世、現世、来世の三世を統すべるといふ観世音菩薩に祈りを捧げた。そして、気づいたのだ。この世は夢のようなものかもしれない、と。観音様が観ている夢、それがこの世の実相じっそうなのだろう。私たちはみな、仏様の手の平の上に乗っている。そうであるなら観音様、どうして私ばかり苦しめるのですか？ 私に幸せな夢を、見させてはくれぬのですか？」

間

伊奈備前の声「小信中島の与三兵衛、人柱となりて竜神の荒あら魂みたまを鎮めたもう。みんなの衆、よいか、末代まで与三兵衛の偉業を讃えよ。与三兵衛らの働きがなかったら、今頃ここは、川底に沈んでおるのだぞ！」

S E 泡の音に重ねて、歓声

千歌（M）「与三さんは、帰らぬ人となった。ちかは小太郎君が必死になって御屋敷へ連れ戻していた」

S E 泡の音に重ねて、祭囃子

千歌（M）「春が訪れると、村人たちは与三さんを祀った。神様は柱と言う。人柱とは人が神様になることを言う。しかしいつの頃からか、与三兵衛がその命と引き換えに堤を守り抜いた、という事実が、人柱という人身御供にされた、という話へ刷り替わってしまった」

間

福助「おちかさん、あなたは私の御守りを、巴さんに渡してしまつたのですね？　……：許してください。私は巴さんと一緒にになります。今のあなたは、とても見てられない。毎夜笛を吹いてばかりだ……」

千歌「（やつれた、病んだ声で）福助さん、それはそれは、ようございますねえ……昨夜も、与三さんが微笑んでくれました。裏山は山菜が豊富で、よう採れます。さあ、さあ、汁物でも召し上がってください」

福助「（涙声で）これは汁物では、ありませんよ……」

千歌（M）「ちかは誰とも結婚することなく、余生を送った。神田の家には福助さんが養子に入った。ちかが病<sup>やまい</sup>で亡くなったとき、枕元には龍笛があった。与三さんが遺した龍笛だった。そしてその手には、観音様の懐中仏が握られていたという」

M 泡の音、観音経、ともにOUT

SE 学校チャイム

千歌（M）「気づけば、里美、恭子、有紗と私は、校舎の屋上にいた。空は晴れ上がり、青く、澄み切っていた」

里美「まさに台風一過、ってやつだな」

恭子「私、不思議な夢を見ていた」

有紗「先輩、消えちゃった」

千歌（M）「それが夢なのか、現実なのか、あるいはどうして今ここにいるのかさえ、私たちにはわからなかった」

千歌（M）「私たちは屋上の端に立ち、手す

りを握りしめ、街を一望した」

恭子「一宮は、与三兵衛が守り抜いた街だったんだね。治水工事がうまくいかなかったら、この街は開けてないって、宮川さんも言ってたし」

千歌（M）「そんな何気ない恭子の一言が、心に刺さった。そうか、そうなんだ。与三さんが愛したのは、ちかだけじゃない。村を、村に生きる人々みんなの生活を、同じように大切に想っていた。だから命に代えでも、あの堤を守り抜いた……」

男の声「みなが平安に暮らせる世が到来するまで、俺たちの祝言もお預けとしよう」

男の声「戦争とは馬鹿げたものです。しかしその馬鹿さ加減にみなが気づくには、多くの命が犠牲とならねばならぬのでしよう」

千歌（M）「走馬灯が、再び脳裏を駆け巡った。そうだ、本当にあの人はいつも、自分のことなんて置き去りで、みんなのことを考えていた。先輩だって同じだ」

勇樹の声「音楽で世界が変えられる、って言ったら、笑うだろ？　でも変えられるんだよ。うちのメンバーで学校訪問したとき、不登校だった子に声をかけたんだ。そして、らさ、来てくれた。これって世界が変わった瞬間だと思わない？　少なくとも、その子の世界はその日、変わったんだ」

千歌（M）「私は幼い。間違ってた。先輩さえそばにいてくれたらいいと、他にないといけないと、そう思っていた。けれどそれは私のエゴだ。私の目には、先輩のことが映ってなかった。お婆ちゃんの声が、心の中で響く……」

祖母の声「みんなが愛だと思ひ込んどるもののは、う、飢えや、渴愛や。喉の渴きに同じ。相手を呑み込み、己おのれの胃袋を満たそうとしておるだけ。それに比して観音様の愛は、う、大きな悲しみと書いて、大悲たいひと呼ぶ」

千歌「（子ども声で）大悲？　お婆ちゃん、どうして愛が悲しみなの？」

祖母の声「それがわかるようになったとき、千歌、おまえはな、本当の愛に気づくことになるうて。大丈夫、心配せんでええ、観音様はなあ、きっとそこまで、おまえを導いてくださろう」

千歌「……恭子、『本当の意味で人が人を愛せるようになるには千年かかる』って、そう言ったよね」

恭子「うん。それが？」

千歌「なんだか私、少しだけ、わかりかけてるような気がする……」

千歌（M）「（つぶやくように）だって勇樹先輩の愛、与三さんの愛は、目の前で苦しむ人たち、すべての人たちに向けられていたのだから。この世界の、すべての悲しみと共に、在ったのだから……」

里美「ゲッ！ 鬼火！」

恭子「マジか！ 千歌ッ、後ろッ」

千歌（M）「振り向くと、屋上の真ん中に、青白い鬼火が浮かんでいた」

恭子「うわ！」

有紗「近づいてくるよ」

里美「千歌、待て！ 何故に自ら寄ってくる？」

千歌「……先輩、なんですか？」

恭子&里美&有紗「先輩？ え？」

千歌（M）「私には聞こえる。たぶん私にだけ、聞こえている。先輩の、言葉……私には先輩と、一つの約束をした。それを果たすにはきつと、長い長い時間が、それこそ久遠の歳月が要るのだろう……けれど私は決意を込めて、頷く。この世界のすべてを、私は愛したいと思う。この世界に在る、すべての悲しみが消えない限り、私の幸せは、私たち二人の幸せは、きつと千年先の、その後でいい……と、鬼火がにっこり、微笑んでくれたように、私には見えた」

里美「おい、鬼火がッ」

恭子「……き、消えた」

有紗「どこへ？」

千歌（M）「三人は腰が抜けたか、しゃがみ

込み、そのまま寝そべってしまった。呆然  
自失といった感じで、空を見上げている」

里美「……なんっーか、いろんなことあり  
過ぎで、どっと疲れてきたし」

恭子「私はなんか、お腹すいたなあ」

有紗「雲が、ドーナツにみえる」

千歌（M）「私は両手を腰に当て、体をくの  
字に曲げて、三人を真上から見下ろす」

千歌「おいしいものでも、食べに行くかい？」

恭子「オムライス！」

&里美「サンドウィッチ！」

&有紗「ドーナツ！」

ニュース「台風一五号は現在、温帯低気圧に  
変わりました。各地で台風一過の素晴らし  
い青空が広がっています。この暖かい陽射  
しはしばらく続くとみられ、週末のレジャ  
ー施設は、家族連れで賑わいそうです」

M

龍笛 & 琴（テーマ曲）

演奏に重ねて、エンドロール等

【第四話・了】

『久遠 人柱観音奇譚』・了

【登場人物表】

〔現代パート〕

- |             |      |           |
|-------------|------|-----------|
| ① 千歌        | (一八) | 主人公       |
| ② 恭子        | (一八) | 千歌の友人     |
| ③ 里美        | (一八) | 千歌の友人     |
| ④ 有紗        | (一八) | 千歌の友人     |
| ⑤ 恵         | (五〇) | 学校の先生     |
| ⑥ 宮川        | (五〇) | 歴史資料館の学芸員 |
| ⑦ 真奈美       | (四九) | 千歌の母      |
| ⑧ 勇樹        | (一八) | 千歌の恋人     |
| ⑨ ニュースキャスター |      |           |
| (そのほか)      |      |           |
| ⑩ 車内アナウンス   |      |           |
| ⑪ 乗客男       |      |           |
| ⑫ 乗客女       |      |           |
| ⑬ 乗務員       |      |           |
| ⑭ 犯人        |      |           |

〔過去パート〕

①	ちか	(一八)	主人公
②	与三兵衛	(二〇)	ちかの想い人
③	伝右衛門	(四八)	ちかの父
④	みき	(四〇)	ちかの母
⑤	叔母	(六〇)	ちかの親族
⑥	福助	(二〇)	ちかの婚約者
⑦	たえ	(三八)	福助の母
⑧	巴	(一六)	伝右衛門家の下女
⑨	小太郎	(一五)	与三を慕う少年
⑩	了誓	(六〇)	僧侶
⑪	伊奈備前	(??)	普請奉行
(そのほか)			
⑫	侍		
⑬	下男		
⑭	若者 A		
⑮	村人 A		
⑯	村人 B		
⑰	村人 C		

※この脚本の利用を希望される方は、事前に  
わたしどもアート・ポイエーシスまでご相  
談ください。よろしくお願いいたします。

<https://art-poesis.org>

[art.poesis.2022@gmail.com](mailto:art.poesis.2022@gmail.com)